

北朝鮮「平壤の貴族たち」の行く末／ゲーム使って消費者つかむ

AERA

昭和43年6月10日創刊 読者登録証可 2012年4月23日発行
毎週月曜刊行（4月16日発売） 価格1,300円

戦略的容姿で仕事も就職も



'12.4.23

No.17定価380円

アエラ

バレエダンサー アリーナ・コジョカル

危機意識や情報格差から決断 放射能が変えた私の新しい仕事

「3・11」は人々の暮らしを揺るがし、仕事の方向性も変えた。放射能があらわにした情報格差、安全・危機意識の温度差……。その溝を埋めるために「行動」した5人の新しい仕事軸は？

編集部 古川雅子 写真 鶴崎 燃

勝屋なつみさん

日本大学芸術学部卒業。28歳でマガジンハウスに入社。雑誌編集長などを務め2009年に退職。現在は「代官山 葛屋書店」で料理フロアを中心に顧客対応、本の配置、フェア開催を行う



書コーナーに寄せた。
「1年経ってわかったことがたくさんあります。」

メディアの限界。雑誌の仕事でも感じていたそのことを、よりあらわな形で突きつけられたのが3・11だった。

◆ 本当のことを手渡す

枝野幸男官房長官(当時)が菌切れの悪い状況説明を繰り返していた頃、情報感度が高い人との付き合いが多い勝屋さんのもとには、後に「原子力ムラ」と批判されるような専門家たち

の「報道されない動き」がメールで伝えられた。ガイガーカウンターを購入して神奈川県自宅周辺を測り、避難すべき家族と話し合った。周囲には「安全だ」と報じられればすぐに警戒を解き、逆に警戒している人を、「気にしすぎじゃないか」と牽制する人もいた。入手できた情報の違いによる温度差だった。

勝屋さんは3・11後に「ツイッターデビュー」もした。自分

いま、幅広い知識を持つ。文化のコンシエルジュとして店頭に立つ。

異色の転職に踏み切ったきっかけは、東日本大震災だった。メディアにいた人間だからこそ、福島第一原発の事故をめぐる新聞やテレビの報道に危機感を抱いた。その思いをぶつけた文章がある。現在、同店で開催している「3・11から学んだこと」(4月28日まで)という企画選

かつては女性誌「クローワッサン」の編集長だった。勝屋なつみさん(57)は新聞で書店員募集の求人広告を見つけ、エントリーシートにこう書いた。
「書店はメディアになるのではないか」

東京の「代官山 葛屋書店」。パラウンジなども併設したオトナ向けの「TSUTAYA」として昨年12月にオープンし、注目を集めている。勝屋さんは

得られたとしても、国というものは本当のことを悪気もなく隠すということ。マスメディアも、なかなか本当のことを教えてくれないということ(一部抜粋) 広告主の意向に縛られるマス

元・福島原発下請け作業員は… 職業選択の余裕はない

福島第一原発で、原子炉に巡らす水の不純物を取り除く「水処理」の作業員として働いていました。震災当日はたまたま夜勤明けで自宅にいましたが、夕方から車で第一に向かうはずでした。事故で仕事はなくなりました。通常のプロセスで処理すべき水は汚染水となり、全く違う次元で慎重に扱わなければならなくなったからです。

警戒区域に指定されている浪江町に住んでいましたから、家族全員、親戚を頼って栃木県に逃げました。6歳と4歳の子供と妻はそこに残り、その後はしばらく茨城県の東海村で働きました。でも11月でその仕事も途切れた。群馬県のごみの最終処分場に再就職しましたが、事故で原発の仕事から足抜けしたなんていうことはないですよ。仕事さえあれば、原発の作業員を続けていたと思います。生活のために。そもそも建てて2年のマイホームにもいつ帰れるかわからない被災者です。30年ローンも残っています。職業選択の余裕はありません。

津波の被災者でもあるんです。海辺の実家は流されました。身内も亡くなりました。被災し故郷を追われた苦しみと、身内と死別した悲しみと。その上、原発の是非を問われて、そこで仕事をしていただけで色眼鏡で見られるのはつらい。

震災からの気づきを職業に反映できる心の余裕は、被災したと真ん中の人間にはありません。結果的に脱原発転職ですが、心の中は複雑です。

福島県浪江町出身の酒井さん(男性・28)談

で、そんなの買うくらいなら、測定器をと思ひまして」
採算度外視の社会的事業に駆り立てられたのは、ツイッターから聞こえてくる慟哭のようなつぶやきだった。放射性物質に不安を募らせる消費者。出荷してよいのか逡巡する生産者。農業をやめ路頭に迷った人、泣く泣く牛を手放した人、絶望して自殺した人。悲しい話はいくらでもあった。測っていないから、

汚染の度合いがわからず、不安だけが募っていた。
柏市が放射能の「ホットスポット」として知られるようになってからも、行政の動きはぶつかった。チェルノブイリの事故当時から食品の測定を続けてきた市民団体が、機械の購入を求めて請願書を出したが、延長審議になった。高松さんはその議会を傍聴し、「引き裂かれた消費者と生産者をつなぎ直すには、

早く測れる場所をつくらないと。行政が始めるまでの穴埋めが必要」と判断した。
起業したら、「風」は吹いた。
求人雑誌でスタッフを募集したら、60人もが殺到。測定器の使い方に難儀してツイッターでつぶやいたら、高エネルギー加速器研究機構の野尻美保子教授が駆けつけた。野尻教授の紹介で、1週間後にはスイスのジュネーブにいた東京大学理学系研究科の早野龍五教授も、測定指南に訪れた。その後もツイッターで輪が広がり、意見交換の交流「オフ会」として大阪大学の菊池誠教授、水産物の放射能汚染を調べる勝川俊雄・三重大学准教授ら計測の大家が一堂に集まったこともある。それぞれの

ツイッターのフォロワーを合計すると、20万人を超える。全員「無報酬」で、そのうえベクミルの利用料まで払った。
「さりげない後押しがあるから、がんばれる」(高松さん)
3・11後には、常時にはあり得ないような能力の持ち寄りを実現した。ソーシャルメディアを使うことで、本業を持ちながらさまざまなプロジェクトに携わる人も増えた。
一方で、本業を手放し、市民活動に全力投球する人も現れた。世田谷区に住む中山瑞穂さん(42)。都内のサービス系企業を昨年夏に退職した。発端は、放射能問題だった。
震災当日、顧客の身の安全を守ることに優先され、3歳の息子を保育園に迎えに行くこともできなかったが、職務だと割り

20年のキャリアを中断
会社でも温度差を突きつけられる出来事が続いた。
関東南部の契約農家を訪問する春のファミリーツアーを実施。中山さんが広報を担当していた。土にまみれて収穫を満喫する企画だが、子どものいる家庭に広めてもよいことなのか。葛藤した。ラジオに出演して、「ぜひ来てくださーい」と宣伝しながら、家ではなるべく遠方の食材を選ぶ自己矛盾。夜も眠れなくなった。
東北の食べ物を応援する企画のニュースリリースを書くことに悩む一方で、保育園に弁当持参を交渉していた。
中山さんが同僚の前で、「この産地の食材を使わなければならぬのですか」と発言したら、丁寧に諭された。それは風評だと。会社の人に訴えても取りあってもえな



高松素弘さん(写真左)
NECの子会社を退職後、30歳でソフトウェア開発会社を起業。震災当初は測定した空間放射線量をユーストリムで中継した。昨年10月、放射能測定所「ベクミル」(千葉県柏市)を開所。上野店も運営する



から情報を取りに行く人と、マスメディアの情報をそのまま受け取る人との格差にも気づいた。ツイッターを始めたら、専門家とも直接つながり、リアルタイムで生の情報を得られること、「この人！」と見込んだ人の動きをフォローすれば精度も深度も高い情報が得られることを実感できた。
55歳で出版社を辞め、フリーランスで執筆活動をしていた。書いていたのは、「作業療法はおもしろい」という介護本。未知の職業に転じたのは、メディアは暮らしのそこそこ偏在しているぶん、「玉」と「石」と

を嘆き分けるリテラシーが必要と考えたから。映画、広告会社、出版社とあらゆる媒体を渡り歩いてきた自分が役立てることがあるのではないか。その舞台に「書店」を選んだ。書店に集まる情報は玉石混交ではあるものの、本当のこと、も埋もれている。それを発掘して手渡せば、書店がメディアになれるのではないかと発想した。

シフト制で不規則、立ちっぱなし、棚の整理で本を運ぶのも、「更年期障害もある身には正直きつい」。だが、「書店という大切な空間を残すため、可能性を探りたい」。そう考えている。
リミッターを外す
直接の被災者でなくとも、3・11で人生観や仕事観を揺るがされた人は少なくない。給料、待遇といった条件面を超え、新しいキャリアへと突き動かす原動力は何か。
勝屋さんが薦める「ふんばろう東日本支援プロジェクト」代表の西條剛史さんの著書「人を助けるすごい仕組み」に、ヒントがある。



中山瑞穂さん
情報誌出版会社を経て、広告会社で16年営業を担当。2008年にサービス系企業へ転職し、マーケティング部門の広報を務めた。昨年夏からは、世田谷こども守る会の事務局を務める

ボランティア経験のない著者が被災地に入り、ツイッターやフェイスブックなどつながる仕組みを利用しながら情報を発信。10万単位のフォロワーがいる著名人が次々と協力者になり、糸井重里さんとの対談に呼ばれ、政治家とも直接つながり、15万円以上の物資支援を成立させる日本最大級の支援組織ができた。行動しようと思った時の心の動きを、西條さんはこう記録した。
「本当の勇気とは何か、わかった気がした。そのとき、自分の

中のリミッターは、完全に外れた。未曾有の事態には、未曾有の自分になるしかない。できることはすべてする(一部抜粋)「リミッター」とは、初めからこれはできないと決めつける、自己抑制の壁だ。千葉県柏市で食品などの放射線量を測れる市民測定所「ベクミル」を設立した高松素弘さん(47)もまた、その壁を突破した一人だろう。
食品を測れる放射能測定器は高額だ。ベクミル2店舗でそろえた9台は計1900万円にも

なる。IT会社を経営する傍ら始めた副業とはいえず、「機器代は1円も回収できていない」。利用者が払う1検体980円(細かく測れる機種は3980円)の測定費は、測定所の家賃や光熱費、スタッフの人員費で消える。立ち上げ時には利用者が詰めかけ、本業のクライアントに迷惑をかけたばなしだった。「うちには5歳と9歳の子もがいて、他人事じゃないと思っただけです。ちょうど趣味の車を買って替えようと思っていたの



ファンは10、20代前半が中心だが、人種はばらばら。アニメのキャラクターのコスプレ姿のファンもいた



ニューヨーク・タイムズ紙の音楽評論家ジョン・ペアレス氏は「READY STEADY GO」の熱狂に、「明らかにアニメが言葉の壁を超える助けになった」と書いた

音楽の聖地」でのL'Arc公演

無謀ではなかった

マドンナやレディー・ガガ級でないと完売は至難の業と言われる
ニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデン。
初の単独公演の地にここを選んだ日本人アーティストの成否は――。

ステージの迫力に釣られるように観客が立ち上がる。前々日、ボーカルのhydeにインタビュールした際の一言を思い出した。「コアなファン以外のグレイ層は最初は棒立ちでも、いい演奏をすれば踊らせてくれる。なんと少しでも踊らせてやりたい、それが醍醐味でもあるんです」

米国ではアジア諸国に比べてL'Arcの知名度は低いと言われる。コアなファンは、アニメの主題歌を通じて知った層だ。「XX」などの英語詞の楽曲以上に盛り上がったのは、2004年から全米で放映されたアニメ「鋼の錬金術師（英題はフルメタル・アルケミスト）」の主題歌「READY STEADY GO」。2階席の床が振動するほどだった。

メリーランド州から公演に来ていたサマンサ・リーさん(13)は1年ほど前に「L'Arc」の存在を知り、夢中になった。片道3時間以上の道のりを母親に頼んで連れてきてもらったという。「これまで聞いたどんな音楽とも違う。彼らのルックスがホントなのも好きな理由です」

ロサンゼルスに住むジェームス・フォルネスさん(31)は1990年代後半にルナシーをきっかけに日本のロックに目覚め、L'Arcのファンに。ツアー日程の発表と同時に休暇をとった。「ギターに重きをおいたサウンドが好き。彼らのパフォーマンスは想像以上だった。次は必ず日本に見に行きます」

「ここまで20年かかった」
ショー後に発表された動員数は1万2千人。ニューヨークでの初ライブにしては大健闘だ。翌日のニューヨーク・タイムズ紙には「ニューヨークでのデビュー、20年かけて」と、カラー写真入りで大きく掲載された。記事はhydeの観客に対する「ここにくるのに20年かかった、また会えるかな？」という言葉で締めくくられていた。

ライブ前に今回の「快拳」についてhydeはこう語った。「うれしい反面、なぜ数いる先輩たちが海外に出ていかなかったのか、という不思議な気持ちもある。今の日本に一番足りないのは元気。今回のライブも、やらないよりはやるほうが日本人に元気を与えられるんじゃないかと思う部分もあるんです」

ライター 佐久間裕美子(ニューヨーク)

かった。家庭で子どもを守る行為は、本来誰も安全につながるはずなのに、企業活動の中では理解されなかった。そんな折、「世田谷ことも守る会」に参加した。そこで初めて、自分と同じ不安を持つ母親たちと本音を言い合えた。「東」になると行政も動く。実感した。給食の放射能測定などを求める署名を2万人近く集め、区長や議会を動かす。測定器の購入につながった。

専門変え原子カマラ

今、企業で身に着けた広報の職能と管理職の経験を生かしている。世田谷の会の母親たちは、ボランティアの集合体である会が空中分解しないよう組織強化を図る。コアメンバー40人は、クロスドのフェイスブックのグループにまとめ、情報の共有と意見交換を活発に行う。そのなかから14人が事務局となり、大きな方向性などは密に話し合う態勢を敷いている。



坪倉正治さん

東京大学医学部卒業後、亀田総合病院を経て帝京大学血液内科助手に。昨春から東大医学研究所と、非常勤医師を務める南相馬市立総合病院を往復する。内部被曝検査を担当

出かけ、役人とも直に話す。3月末には、福島の子どものための保養活動を手伝った。市民測定所も応援する。時には会を離れて個でも動く。「思い立ったら、どの組織に顔を出しても、個で動いても、誰にも文句を言われない。そこが企業と違うところですね」

今春、国立大学の大学院に入学した男性(22)は、原子力工学を研究内容に選んだ。大学時代の専攻は機械工学。将来、交通インフラの企業を志望しているが、専門を変えたのは、「人命とリスク抜きに、企業活動はあり得ないと思い直し、ま

ず自分が理解するために、「原子カマラ」のど真ん中に飛び込むことにしました」
何を求めて働くか。何のために働くか。3・11は重い課題を突きつけている。「医師の原点に立ち返りました」と話すのは、東京大学医学研究所の坪倉正治医師(30)だ。原発事故以来、週3日は福島県南相馬市の市立総合病院で診療し、市民の内部被曝に向き合う。本来は血液内科が専門で、がん医療に携わってきた。放射線被曝医療は門外漢だが、南相馬市の医師が足りない聞き、応援に行ったのが始まりだった。

地域医療と同じ

昨秋、最新式の機械が入ってからは1日110人のペースに。精密に測れるようになった。検査データが蓄積され、放射性セシウムは排泄で減るといった、全体の傾向が確認できた。再検査した多くの人の数値が減少したことも、うれしいニュースだった。ただほんの数人、再検査後の値が横ばいか上昇した高齢者もいた。食生活など丁寧な問診していくと、山に生えている自家用のきのこを採り放題で食べていた、というその人特有の課題も見えてきた。

「検査したデータをもとに、生活で気をつけることを診療の中で丁寧に伝えていく。これ、測る機械がWBCに変わっただけで、原則は地元の人たちと密に触れ合う地域医療と同じだと途中から気づきました」

膝を突き合わせる地域医療に携わるのは、初めての経験。今年1月からは、診療のほかに住民を集めた小さな説明会を20回以上重ねて、素朴な疑問にも耳を傾けた。こうした地道な活動を続けたら、病院へのクレームが一切なくなった。対話の大切さを実感している。

震災は、人々の仕事や生き方に、新しい軸をもたらしただけで、それを太くしていくことで、放射能が生んだ人々の分断を乗り越えていけるかもしれない。取材した5人それぞれの1年からの、そんな希望を感じた。